

中英語聖書と近代英語聖書におけるラテン語接続法の表出形態について

佐藤 信正[†]

On the Expression of the Latin Subjunctive in the Middle English Bibles and Early Modern English Bibles

Nobumasa Sato

1. はじめに

この研究は、ラテン語聖書を原典とする中英語聖書と近代英語聖書におけるラテン語接続法の英訳表現の比較を通して、その接続法の認識の表出形態差から英語という言語の通時的特性を検討するものである。英語の接続法については、古英語では独自の屈折形態が存在していたが、中英語を通して減少し、近代英語においては、be 動詞や慣用表現、命令的接続法を例外とすればほぼ消滅した。このような英語の接続法の消滅への過程で、接続法が多用されるラテン語聖書はどのような英語文法の道具立てをもって翻訳表現されたのだろうか。この研究では、その表現を検討し、英語という言語の特性を提示する。また従来、英語史研究において英訳聖書が使用された場合、原典の適正性および中英語聖書写本の適正性が十分には配慮されないことが多かったが、本研究では付随的な目的として、対象資料の適正性も検討した。

2. 先行研究

本研究の主要な先行研究をまず提示したい。それらは大別して、中英語聖書の構文研究と英訳聖書の接続法研究（法助動詞研究を含む）という2つの分野に分かれる。

2.1 中英語聖書の構文研究

2.1.1 Yonekura (1985)

中英語聖書の構文研究の先行研究として、本研究がもっとも参考にしたのが、Yonekura (1985) である。*The Language of the Wycliffite Bible: The Syntactic Differences between the Two Versions* という表題が示すように、同研究は Wycliffite Bible の前期版と後期版の2つの版をその構文においてタイプ分けして列記したものである。

Yonekura (1985) は、随所で原典ウルガタを参照させているが、基本的には参照に留まっていた、ラテン語の接続法形態の動詞がどのように英語に対応しているかといった包括的な調査は行っていない。このため、ラテン語の接続法動詞の多くが英語の迂言表現に対応されていることは扱われていない。さらに、ラテン語の接続法の翻訳表現において、前期版で従属節構文を取るが後期版では to 不定詞に書き換わるという現象も取り上げられていない。

しかし、ラテン語において形態的に接続法と認識できる動詞は接続法の文法的な認識を担っているとして、ラテン語で定立された法認識が英語においてどのように表現されるかという視点から英訳表現を範列化することは可能である。このことが同研究から本研究が得た示唆である。

なお、Yonekura (1985) では、ラテン語原典として現代的に再構成された Stuttgart Vulgate を採用し、また時代的な制約もあってテキストは、Forshall & Madden 版のみを採用している点で検討には不十分であり、for-to 不定詞の分析などで不確実な結論が導かれている。

2.1.2 Warner (1982)

英訳聖書の史的文法研究に隣接した研究が、Warner (1982) である。同研究は、*Complementation in Middle English syntax and the methodology of historical syntax* という表題から察せられるように、中英語期の補文の文法研究とその手法としての統計学を応用した調査であり、*a study of the Wycliffite sermons* として、研究対象がウイクリフの説教テキストであることが示されている。だが、その考察では、Forshall & Madden 版の EV と LV のテキストも検討されている。

Warner (1982) の指摘で、本研究にもっとも示唆的となった点は、中英語聖書の前期版と後期版の差異を言語学研究の重要課題として示したことである。同研究は、主要な仮説を検証するものではなく、対象テキストの分

[†]2022年度修了（人文学プログラム）

（なお、この研究は日本中世英語英文学学会第39回全国大会にて口頭発表を行った。）

析から引き出された結論を複数列挙しているのみであるが、その結論の6番目、「ウィクリフ派聖書の2つの版の存在は、IME（後期中英語）における受容性の相対的なレベルを示すための貴重なツールである」は、本研究の基礎となった。

2.2 英訳聖書の接続法研究（法助動詞研究を含む）

2.2.1 Harsh (1968)

Harsh (1968) は、本研究にもっとも類似した先行研究である。同研究は、1960 年台後半までの英語接続法の文法理論を整理した上で、英訳聖書、古英語・中英語期の世俗文書と翻訳文書、中英語方言、劇台本の各側面で、英語接続法を通時的にかつ定量的に扱っている。なかでも本研究の先行研究となるのは、第2章の聖書翻訳の議論であり、各時代の5つの英訳聖書テキストが比較されている。しかし、その調査対象は、『マタイによる福音書』の7章から14章までの8章に限定されているため、該当福音書の35%に過ぎない。また、原典言語はラテン語とギリシャ語が混在しているので語レベルでの対照が取れない。

Harsh (1968) の分析は、3つの視点、即ち、屈折形態の接続法（推定は含まれている）、接続法の法性を示す構造（迂言表現には特定の基準を設けている）、接続法過去、から分析される。だが、その簡素さゆえの妥当性は示しているものの、接続法用例は構文的に分類されていない。このため、中英語聖書の従属節において、ラテン語の接続法現在に英語接続法現在の屈折形態が対応し、ラテン語の接続法未完了過去が英語では迂言表現を取るという一定の規則性があることは導けていない。

2.2.2 Nishide (1981)

Nishide (1981) は、Harsh (1968) の方法論的な枠組みを継承し、洗練させた研究である。対象は、『ヨハネによる福音書』の全章となっているが、この福音書が選択された理由は述べられていない。

Nishide (1981) では、原典聖書の想定をラテン語による、Vulgata Clementina に固定し、英訳聖書もここから翻訳された中英語聖書、Douay-Rheims 聖書 (1582)、Douay-Rheims 改訂聖書 (1749)、Confraternity 聖書 (1941) に限定している。この点で、本研究の先駆的な方法論が採用されている。ただし、中英語聖書については、Forshall & Madden 版の後期版のみが使用されている。

Nishide (1981) の結論は、Harsh (1968) の研究を洗練化したこともあり、本研究でも確認されたが、中英語では、迂言用法のすべてが過去時制であり、接続法過去時制の動詞単体の節は見られなかったことなどが導かれている。

2.2.3 浦田 (2010)

浦田 (2010) は、中英語から近代英語、現代語に翻訳された聖書で接続法表出形態を扱う一連の調査の一部として、中英語聖書の接続法を扱っている。方法論としては、『マタイによる福音書』から英語における接続法の屈折形態を調査しており、ラテン語接続法の法認識の表出形態で

ある迂言表現については扱っていない。

浦田 (2010) で興味深い点は、英訳表現において直説法か接続法かの判別が難しい例では、原典ウルガタを参照していることである。ならば、最初からウルガタにおける接続法と中英語の対応を考察することが可能であり、本研究ではそのような方法論を取ることにした。

3. 研究手法

3.1 方法論

本研究は次の方法論で実施する。Vulgata Clementina (V と略記) をラテン語聖書の原典と想定し、その英訳聖書として、中英語期の中英語聖書 (1382 - 1395)、初期近代英語期の Douay-Rheims 聖書 (1582, EDR と略記)、後期近代英語の Richard Challoner 改訂 Douay-Rheims 聖書 (1752, RDR と略記)、現代英語の Knox 聖書 (1945, KNX と略記) を比較する。比較は、ラテン語原典での基本的な文法機能（時間副詞節など）に分類して行う。

中英語聖書については、4つのテキストを比較する。「Wycliffite 聖書」と呼ばれることの多い Forshall & Madden 編集の前期版 (EV と略記) と後期版 (LV と略記) に加え、本研究では、Christ Church 145 写本と Oxford Bodley 277 写本の、C. Lindberg によるディプロマティック・テキストを扱う (EEV および LLV と略記)。比較するテキストは合計7種類となる。

また、本研究は対象範囲を、テキストとして統一感のある新約聖書『ルカによる福音書』とする。参照は、例えば、『ルカによる福音書』第10章第2節は、Luke 10:2 と略記する。

この比較研究で特に注目するのは、逐語訳されたと見られる中英語聖書の前期版と後期版の相違、また、中英語聖書と初期近代英語聖書の相違の2点である。前者は同時代的な訂正と考えられることから中英語話者の自然な英文法感覚を表し、後者は時代による差異なので通時変化を表すものである。

3.2 研究手順

Vulgata Clementina での接続法の特性を調べるために、『ルカによる福音書』の全節 1,151 件、ワード数にして 18,251 件から、すべての接続法の動詞を抜き出し、屈折形態と文法機能の双方をタグ化した。全件で接続法の動詞は 437 件あった。使用されている節でまとめると、327 節であった。これらの節を各時代の英訳聖書の節と照合した。文法範疇としては、主文 (61件)、時間副詞節 (120件)、条件節 (26件)、英語 that 節に相当する ut 節 (143件)、関係詞節 (87件) の5種類に分類して分析した。

4. 結果

本研究によって惹起される議論を結果としてまとめた

い。「ラテン語聖書ウルガタの接続法は、中世後期および近世から現代においてどのように英訳されたか」について、本研究では、接続法の法認識の表出の種類として5種類に分類できた。(1) 英語動詞の接続法屈折形態による対応、(2) 迂言表現による対応、(3) 構文的対応、(4) 非表出による対応、(5) 意識による対応、である。この分類に沿って、以降の議論を展開する。

4.1 英語動詞の接続法屈折形態による対応

「英語動詞の接続法屈折形態による対応」とは、ラテン語の接続法動詞に対して、そのまま英語の接続法動詞を対応させることであり、機械的な対応である。

Luke 10:2 (機械的な対応)

V : Rogate ergo dominum messis ut mittat operarios in messem suam. [だから収穫の主に願いなさい、その収穫に働く人を送り出すことを。]

EEV : þerfore preȝe ȝee þe lord of þe ryp corn: þat he sende werk men in to his ryp corn/

EDR : Desire therefore the Lord of the haruest, that he send workmen into his haruest.

ラテン語 (V) mittat は、ラテン語動詞 mitto (send) の接続法現在三人称単数であり、これを中英語聖書 (EEV) は、he sende として、英語の接続法現在三人称単数の屈折形態にそのまま移し変えることでラテン語接続法の法認識を表現している。単純かつ機械的対応である。近代英語聖書 (EDR) でも同様である。なお、ラテン語は動詞の人称活用が明確なので英語のように人称代名詞は必要ないが、英語ではこの例文のように人称代名詞として he を補う必要がある。これも機械的な対応の範囲である。

4.2 迂言表現による対応

「迂言表現による対応」とは、ラテン語の接続法動詞に英語法助動詞を用いた迂言表現を当てることである。

Luke 9:40 (迂言表現による対応)

V : et rogavi discipulos tuos ut ejicerent illum, et non potuerunt. [そして弟子たちに願った、これを追い出すように。そして、できなかった。]

EEV : & y preȝede þi disciplis þat þei shulden casten hym out: & þei miȝten not/

ラテン語 (V) ejicerent は、ラテン語動詞 ejicio (expel) の接続法未完了過去三人称複数であり、これを中英語聖書 (EEV) は、þei shulden casten として、動詞の不定詞 casten を法助動詞 should (shulden) による迂言表現に充てることでラテン語接続法の法認識を表現している。

4.2.1 屈折形態と迂言表現の文法的相補分布

ラテン語接続法の英訳表出形態を迂言用法の点から分類

したことで、特に S 群構文において、屈折形態と迂言表現の文法的相補分布ともいえる文法現象が見出された。S 群構文とは、主文動詞が要請する ut 節による従属節を持つ構文である。中英語聖書における S 群構文においては、ラテン語接続法現在には英語接続法現在の屈折形態が対応するのに対して、ラテン語接続法未完了過去には英語では should の迂言表現が組織的に対応し、文法的な相補分布 (complementary distribution) を形成している (表 1)。ゆえに、同一実体の文法的現象として理解することが可能になる。

表 1 英文法対応における相補分布

ラテン語 / 英語表現	屈折形態	迂言表現
ラテン語接続法現在	採用	非採用
ラテン語接続法未完了過去	非採用	採用

具体例を再び確認しよう。Luke 10:2 では、ラテン語接続法現在に英語接続法現在の屈折形態が対応し、Luke 9:40 ではラテン語接続法未完了過去には英語では should の迂言表現が対応している。

Luke 10:2 (ラテン語接続法現在 mittat に英語接続法現在の屈折形態が対応)

V : Rogate ergo dominum messis ut mittat operarios in messem suam.

EEV : þerfore preȝe ȝee þe lord of þe ryp corn: þat he sende werk men in to his ryp corn.

Luke 9:40 (ラテン語接続法未完了過去 ejicerent には should の迂言表現が対応)

V : et rogavi discipulos tuos ut ejicerent illum, et non potuerunt.

EEV : & y preȝede þi disciplis þat þei shulden casten hym out: & þei miȝten not/

なお、このような相補分布は、関係詞節などの名詞節と形容詞節のように埋め込み節 (embedded clause) では異なっていた。

4.2.2 意味論的に空虚な should について

前項で触れた「文法的な相補分布」という現象から、音韻論における相補分布の原則を援用して、文法的等価性が想定できる。つまり、中英語聖書において、英語接続法現在の屈折形態と should の迂言表現は文法的に等価である。その含意は、英語接続法現在の屈折形態が接続法としての文法意識を担いながらも、それ自体 (屈折) は意味論的には空虚 (semantically empty) であるのだから、この should もまた意味論的に空虚であるということである。対象の全範囲においても、中英語聖書における should は単に接続法未完了過去の文法指標にすぎない。

中英語聖書と近代英語聖書におけるラテン語接続法の
表出形態について

このことは、旧来の法助動詞研究における「基底義」という意味的概念そのものに疑念を呈することになる。これらの法助動詞は、基底義といった意味性から発生するのではなく、法の意識そのものの機能了解から文法指標として発生するからである。

この「中英語聖書における should は単に接続法未完了過去の文法指標にすぎない」とする考えは、小野 (1969: 10-11) で補強できる。それによれば、法助動詞 modal auxiliary という用語自体、文法史的には、語形変化の豊富な言語における Subjunctive form に代わるものとして考案されたものであり、接続法相当 (Subjunctive-equivalent) であったとのことである。これには接続法未完了過去の代用指標である should と直説法未来の代用指標である shall が相当する (should と shall が指標する法は異なる)。これらは接続法を多用するラテン語 (ロマンス語) に英語を適合させるための文法的な工夫 (device) であり、その後、英文法の内部に文法化 (grammaticalization) として組み入れられた可能性があるだろう。

この現象は、近代英語になって変化する。接続法相当の工夫が文法化されることによって、法助動詞 (modal auxiliary) が法性動詞 (modal verb) となり、ラテン語時制意識にも対応した、英語文の法性 (モダリティ) の補助 (auxiliary) となることである。つまり、中英語聖書における、接続法の指標としての modal auxiliary = modus supporting device は、近代英語聖書の時代では、英語のモダリティを補う modality expressing device と変化した。

このように、中英語聖書においては、接続法という法の指標であり、「意味論的に空虚な should」であっても、史の変遷により、意味 (「義務」など) を帯びうる法性 (モダリティ) の一レパートリーとして should に機能変化が生じたと考えれば、中英語聖書における should と近代英語聖書における should の差異が理解しやすくなる。中英語聖書における「意味論的に空虚な should」は、近代英語において意味を帯びるようになったため、この意味という点において、他の法助動詞のレパートリー間で差異化が生じるようになった。具体的には、中英語期における should は、近代英語では should / might / would といった新しい意味対立に置かれるようになった。次の Luke 8:38 は、中英語の「意味論的に空虚な should」が近代英語聖書では意味の明確さから might に置き換えられる例である。

Luke 8:38 (中英語において意味論的に空虚な should が近代英語聖書では might になる)

V : Et rogabat illum vir, a quo dæmonia exierant, ut cum eo esset. Dimisit autem eum Jesus, [そして、悪霊を追い出された男は、イエスに従って一緒に行こうと願った。]

EEV : & þe man off whom deuelis wenten out: preþede hym þat he schulde be wip hym.:

EDR : And the man out of whom the Diuels were departed,

desired him that he might be with him.:

さらに近代英語は、接続法現在の法性を担う新しい指標としての may を生み出した。次の例では、ラテン語の接続法現在に対して英語の法助動詞 may が充てられるかに見える。なお、recipient は直接法同型でもある。

Luke 16:4 (ラテン語の接続法現在 recipientに英語の法助動詞 may が充てられる)

V : Scio quid faciam, ut, cum amotus fuero a villicatione, recipient me in domos suas. [私がすべきことを知っている、私が役職を除かれるとき、彼らが私を家に迎えるためのことを。]

EEV : I wot what I shal don: þat whan y shal be remoued fro þe ferme: þei resceyue me in to þer housis/

EDR : I know what I wil doe, that when I shal be remoued from the bailifhip, they may receiue me into their houses.

接続法現在の指標であるこの may も意味論的に空虚としたいところだが、対応するラテン語接続法の時制対立であるべきものが、近代英語では、may / might というように法助動詞間の対立となるため、意味論的な充足は避けられない。加えて、近代英語聖書におけるこのような特質の may / might は主に I 群構文 (主文動詞と関わりなく目的観念を持つ ut 節による従属節の構文) において見られる現象だが、may は従属節内では文法的相補分布を形成しないので、「意味論的に空虚な should」とは異なる。

中英語期における「意味論的に空虚な should」は、中英語または中英語聖書に特有の現象だろうか。近代英語においては、should には潜在的に意味が含意されてしまうが、それでもなお、近代英語の一部において、「意味論的に空虚な should」という文法的指標は残されている。そう推察するのは、現代英語文法家である Coates (1983: 68) であり、これを疑似接続法 (quasi-subjunctive) SHOULD とし、意味論的には空虚である (semantically empty) としている。つまり、現代英語 (英国英語) における命令の接続法で使用される should は疑似接続法であり、意味論的には空虚であるが、現代用例においては、基底義的な「義務」の意味的な含みと表出上区分できないとしている。

現代英語文法家 Leech (2014: 118) も同様の議論を展開している。次の例文における選択または非選択が許される should について、歴史的に見れば「接続法の代用 (subjunctive substitute)」と想定している。

The judges have decided / decreed / insisted / voted that the existing law (should) be maintained.

この that 節内の屈折形態は接続法現在を指しているともみなせるが、現代英語では、法の意識として、接続法現在と

接続未完了過去の差は消失している。

4.3 構文的対応

「構文的対応」とは、英訳時にラテン語の逐語訳を離れ、所定の英語構文を組織的に当てることである。例を見よう。なお、Luke 9:40 は先にあげた例と同じである。

Luke 9:40 (構文的対応)

V: et rogavi discipulos tuos ut ejicerent illum, et non potuerunt.

[そして弟子たちに願った、これを追い出すように。
そして、できなかった。]

EDR: And I desired thy Disciples to cast him out, and they could not.

ラテン語 (V) ejicerent は、ラテン語動詞 ejicio (expel) の接続法未完了過去三人称複数であり、ut ejicerent illum で従属節を形作っている。あえて現代英語で逐語訳すれば命令的接続法として、that they should expel him のようになるだろう。これを近代英語聖書は、to cast him out として to 不定詞句という異なる文法構造で対応させ、ラテン語接続法の法認識の一つである目的機能を強調して表現している。このように異言語への翻訳において、異なる文法構造で対応させることが構文的対応である。

構文的対応は 3 つの文法範疇で見られた。主文用例、条件文、T 群構文である。

4.3.1 主文用例の構文的対応

主文の用例では、英語接続法の機能にも叙想的な含意があるにもかかわらず、ラテン語の接続法に英語の接続法を対応させるのではなく、英訳者らはラテン語接続法を機能理解した上で、同機能を英語で表現する構文を選び出し、その構文をもって対応させていた。具体的には、一人称複数では勧誘表現として、中英語聖書では、次のように動詞と主語をあえて倒置させた構文をとっていた。

Luke 8:22 (主文用例の構文的対応)

V: Transfretemus trans stagnum. [湖を渡ろう。]

EEV: passe we ouer þe stondende watir

Transfretemus は we passen や we shall passen といった語順にはならず、passe we と倒置構文で対応となった。この構文は、Yonekura (1985: 282-285) は接続法として扱っているが、通説的には、英語の命令法と理解されることが多い。いずれにしても、倒置構文とされるのは、英訳者が奨励の機能を理解し、英語文法からその機能に対応させたことによる。また、近代英語聖書では、次のように let us 構文で対応された。

EDR: Let vs strike ouer the lake

同様に、主文用例では、接続法という叙想的法認識から

ではなく、それぞれ人称に対応した機能が英訳者に読み取られた後、勧誘、禁止、使役といった特定の機能それぞれに相当する構文で対応された。

4.3.2 条件文の構文的対応

接続法を含む条件文の英訳では、フランス語風の条件法を迂言表現で模倣した構文が当てられていた。ラテン語の条件文では、条件節でも帰結節でも等しく接続法の屈折を使用するが、英訳聖書では、条件節においては直説法と同形に見える前時制 (時制を意図的に過去にシフトする) を当て、帰結節では過去形助動詞での迂言表現を当てていた。次の Luke 7:39 では帰結節に条件法を使うフランス語の条件文と同じ構造になっている。

Luke 7:39 (帰結節に条件法を使うフランス語の条件文と同じ構造)

V: si esset propheta, sciret utique quæ et qualis est mulier. [もし彼が預言者なら、彼は確かにこの女性が誰でどんな女性かを知っているだろう。]

EEV: If þis were a profete: sopli he shulde wite who & what maner womman.

EDR: This man if he were a Prophet, would know certes who and what manner of woman.

条件節内のラテン語の esset も帰結節内の sciret も同じく接続法未完了過去の三人称単数である。中英語聖書 EEV では、ラテン語接続法未完了過去の esset に英語接続法の過去形の þis were が対応していて、be 動詞の特異性を使って逐語訳的に対応しているが、ラテン語接続法未完了過去の sciret に英語では迂言表現の he shulde wite が対応している。つまり、同種の形態に異なる対応をしている点が注目される。

ここで生じているラテン語接続法の対応の仕組みは、いわゆる「仮定法過去」の構文である「if 英語接続法過去, should / would + infinitive」という構文である。この構文には中英語以来、時代差による変更も見られない。中英語聖書 EEV も近代英語聖書 EDR も基本的に同じ構文となっていて、その骨格は現代英語的にすると次のようになる。

If he were a Prophet, he would know who and what manner of woman.

この構文は、条件法 (le conditionnel) を用いるフランス語文法にきれいに対応している。

S'il était prophète, il saurait qui et quelle sorte de femme.

このように、英語の反実仮定の構文は、フランス語の反実仮定の構文で帰結節の条件法を迂言表現にした構造ときれいに重なっている (wereはétaitに、would know: saurait

中英語聖書と近代英語聖書におけるラテン語接続法の
表出形態について

に対応している)。

条件文については、以上のように、中英語聖書において、ラテン語接続法が逐語訳的に英語に移されているのではなく、条件文としてフランス語に似た構文が適用されていた。

4.3.3 T 群構文の構文的対応

T 群構文とは、方向性を持つ動作の動詞を用いる構文である。この構文では、動作前期版 (EEV) の中英語聖書において逐語訳的な *ut* 構文をとりながら、後期版 (LLV) で *to* 不定詞の構文に変更される傾向がある。

Luke 3:7 (T 群構文における *to* 不定詞への書き換え)

V : Dicebat ergo ad turbas quæ exhibant ut baptizarentur ab ipso.

[そこで彼は、出て行く群衆に言った、彼からバプテスマを受けるように。]

EEV : þerfore he seide to þe kumpanyes þat wenten out þat þei shulden be baptisid of hym.

LLV : þefore he seide to þe puple whiche wenten out to be baptisid of him.

EDR : He said therefore to the multitudes that went forth to be baptized of him.

T 群構文における、ラテン語 *ut* 節の英語 *to* 不定詞句化 (構文的対応) は、中英語聖書の前期版と後期版の差異の特徴である。前期版において逐語訳的にされていたものが (EEV: þat þei shulden be baptisid), 後期版で目的という機能性の了解から構文的対応を受け *to* 不定詞化された。これは近代英語聖書 EDR でも踏襲されている (LLV: to be baptisid / EDR: to be baptized)。

中英語聖書の前期版と後期版は、工程的には前期版が先行して編まれたのち、後期版で改訂されたことにはなるが、時代的には両者は同時代の産物であり、英文法の意識としても同時代であると見なしてよいだろう。現存する写本は前期版と後期版の二系が数において後期版が多いとしても併存したのは、翻訳のスコポス (目的) の差異を示しているであろう。しかし、中英語聖書においてより自然な英語は後期版であったと想定してもよく、ラテン語 *ut* 節の接続法は T 群構文のように目的機能を明確に担うときは、接続法を含む *that* 構文ではなく、*to* 不定詞によって構文的対応がなされていた。つまり、T 群構文における目的機能の *that* 節は中英語期にあっても、英文法として不自然であり、英語話者の文法直観が優先された。

4.4 非表出による対応

「非表出による対応」とは、ラテン語接続法の法認識を除去し、英語においてそれを非表出とすることである。ラテン語接続法の法認識が英訳に意図的に反映されない文法範疇、つまり、非表出による対応には、非現在の時間副詞節と関係詞節の副詞的用法の2種類が存在することがわかった。同時に、これは副詞節以外の環境にはなかったこと

も含意される。

4.4.1 非現在時制の時間副詞節における非対応

時間副詞節では、現在時制を除いて、各時代の英訳聖書において法認識は除去された。

Luke 5:12 (ラテン語接続法未完了過去が英訳時に直説法過去になる)

V : Et factum est, cum esset in una civitatum, et ecce vir plenus lepra, et videns Jesum, et procidens in faciem, rogavit eum, dicens: [このことがあった、彼が街のひとつにいたというとき、レプラを病む男がいて、イエスを見て、顔を地に伏せて、願い、言った。]

EEV : & It is do whan he was in oen of þe cites: & lo a man ful of lepre· & seende Jesus· & fallende down in to his face: preþede hym: seiende/

EDR : And it came to passe, when he was in one of the cities, & behold a man ful of leprosie, and seeing IESVS, and falling on his face, besought him saying:

ラテン語の *esset* は接続法未完了過去だが、このような *cum* 節内の接続法の法認識は英訳聖書には反映されず、「when + 直接法過去」となり、組織的に除去されている。このため、ラテン語接続法が有する、出来事の伝聞性の含意は、英語では表現されていない。また、例を省略するが、「*dum* + 接続法未完了過去」は「*while* + 直接法過去」となり、接続法の理解は英語で非表示となる。

他方、接続法の法認識が英訳時に除去されず残るのは、ラテン語の接続法現在が英訳文において (un) *til* 節を取る場合であり、この英訳節は、ラテン語の *dum* 節でも *donec* 節の翻訳でも発生することから、法の意識の発生要件は、英語翻訳時の (un) *til* 構文である。英訳時に (un) *til* 構文として時間副詞節が意味的に理解され、英語接続法が当てられている。これは広義には構文的対応とも言える。

Luke 12:50 (接続法現在が *til* 節接続法現在に対応する)

V: Baptismo autem habeo baptizari: et quomodo coarctor usque dum perficiatur? [私にはしかし受けるべき洗礼があり、どれほど耐えるか、完遂するまでに?]

EEV: soþli I haue to be baptisid with baptem: & hou I am constreyned til þat it be parfitli don/

EDR: But I haue to be baptized with a Baptisme: and how am I straitned vntil it be dispatched.

ラテン語 *perficiatur* は接続法現在で、「*dum* + 接続法現在」の構成が、英語で「(un) *til* + 英語接続法現在屈折形態」に翻訳されている。

4.4.2 関係詞節の副詞的用法における非対応

関係詞節の副詞的用法でも接続法認識は非表示となる。

Luke 1:7 (中英語聖書における *quod* の定訳語は *for* で、

法認識は除かれる)

V: Et non erat illis filius, eo quod esset Elisabeth sterilis, et ambo processissent in diebus suis. [そして彼らに息子はなく、エリザベトは不妊であったようなので、二人とも日々を過ごしていた。]

EEV: & a sone was not to hem for þat elizabeþ was bareyn: & bopen hadden go forþ in her dajis/

EDR: and they had no sonne: for that Elizabeth was barren, and both were wel stricken in their daies.

ここでの関係詞 quod は理由を示す接続詞で、副詞節を形成する。そして、quod節内の接続法形態 essetは英語では for that 節内の wasとなり、ラテン語の接続法の法認識は除去される。

なぜ英語の副詞節において、接続法における法の意識が表現されないのだろうか。しかし、このような英語の副詞節の特性は、接続法のみに適応されるのではなく、直説法未来形でも未来時制は非表示とされていることに注目したい。このことは、「when 節では未来事象を示すときでも現在形を使う」という現在の英文法が、すでに中英語期に確立していたことを示すだろう。たとえば、現代英語でも次のように時間副詞節が実質的に未来の時制であっても英語としての when 節では現在形を使う。

When I get home, I will phone you.

*When I will get home, I will phone you.

現代英語では、未来事象を示すとき、通常、when 節で will は使用されない。

他方、形容詞的關係詞においては、中英語聖書の英訳時に法認識の表出が起こり、さらに、ラテン語接続法現在の法認識の指標として、shall が出現する。shall は中英語聖書では、基本的には直説法未来の指標であるのだが、この環境、すなわち埋め込み節 (embedded clause) では接続法現在の指標に変わる。

Luke 17:22 (埋め込み節における接続法認識の明示)

V: Et ait ad discipulos suos: Venient dies quando desideretis videre unum diem Filii hominis, et non videbitis. [そして彼の弟子たちに彼は言った、あなたたちが人の子の日を見たいと切望するかもしれぬ日が来るだろう]

EEV: & he seiþ to his disciples/ dajis shul comen whan 3ee shuln desiren to seen o dai of manes sone:

EDR: And he said to his Disciples: The daies wil come when you shal desire to see one day of the Sonne of man;

ラテン語接続法現在二人称複数の desideretis (desidero) が中英語聖書では、shall の二人称である shuln を付けて未来の含意で翻訳されている (近代英語聖書では shall)。これが直接法未来形 desiderabitis ではない点に注意した

い。

この文法現象も現代英語に類似している。迂言表現の点で考察するなら、副詞節と名詞節における迂言表現の有無についての現象は、次のように現代英語でも見られる。

副詞節 : I will show it to you, when it arrives.

名詞節 : I know when it will arrive.

形容詞節 : The time will soon come when it will arrive.

現代英語では、時間や条件の副詞節において未来や叙想を述べる際、特定の構文マーカー (when や if など) を使うと法の表現が欠落するが、名詞節・形容詞節では法認識が表出する。この現象が中英語聖書でも見られたことになる。

4.5 意識による対応

意識による対応とは、原典言語の文法規則から離れて、翻訳言語においてその意味を再構成する対応である。意識は、基本、現代英語聖書にしか見られない。そもそも前近代では、聖書は聖霊による言葉という考え方があり、意識してはならないものとして想定されていた。

次の例は、既出の Luke 10:2 だが、これに現代英語聖書 (KNX) を加えて比較してみると意識による対応がわかりやすい。

Luke 10:2 (構文対応のない意識は現代英訳の特徴)

V: Rogate ergo dominum messis ut mittat operarios in messem suam. [だから収穫の主に願いなさい、その収穫に働く人を送り出すことを。]

EEV: þerfore pre3e 3ee þe lord of þe ryp corn: þat he sende werk men in to his ryp corn/

EDR: Desire therfore the Lord of the haruest, that he send workmen into his haruest.

KNX: you must ask the Lord to whom the harvest belongs to send labourers out for the harvesting.

意識は現代英語聖書、つまり、現代における翻訳の特性であるが、中英語聖書にまったく見られないものではない。

Luke 20:16 (中英語における例外的意識)

V: Quo audito, dixerunt illi: Absit. [これが聞かれると、彼に言った、ありえないと。]

EEV: þe whiche thing herd: þei seiden to hym/ god forbeede/

EDR: Which they hearing, said to him: God forbid.

ラテン語 (V) absit は、ラテン語動詞 absum (be absent) の接続法現在三人称単数である。現代英語で翻訳するなら、let it not be となるだろう。これを god forbeede / God forbid (神は禁じる) と訳するのは意識であり、近代英語聖書でもこの意識が踏襲されている。

なお、この章句は、Forshall & Madden 版の EV では次のように、Fer be it と英訳されていて、明らかに直訳に近い。

EV : Which þing herd, þei feiden to him, Fer be it.

中英語聖書の 2 つの版、EEV と EV で差が生じている。より古い版とされる EEV では、god forbeede (神は禁じる) と意識され、その後とされる EV では、fer be it (far be it) として逐語訳に近い表現になっているのは奇妙な印象を与える。推測ではあるが、Fer be it 表記は forbeede に似ているため、写本過程で書き換えられたのかもしれない¹⁾。だが、そうであったとしても God の追記は意識的なものであろう。なお、この意識は、Oxford English Dictionary では英語表現における far be it の最古例として同じく EV の創世記とされている。

5. 結論:なぜ英文法から接続法形態が消失したのか

以上の議論から、英文法の本質における一般的な仮説を提示したい。問いは、「なぜ英文法から接続法形態が消失したのか」である。本研究が垣間見たものは、この問いの最初で最大の前提の再考である。つまり、この消失はすでに中英語聖書において生じていたということである。ゆえに、その消失の仕組みこそがこの問いへの答えともなる。それは、各文法範疇において、翻訳時に接続法形態とは異なる工夫や装備によって対応することである。中英語聖書の翻訳は、ラテン語からの直訳とはいえ機械的に均質に対応させたのではなく、英文法の大枠に取り込まれてから、あたかも接続法形態を避けるかのような英語表現がそれぞれ適用された。

ラテン語接続法の主文用法では、その文機能の了解から、文意として等価な英語の別構文に置き換えられた。これらには、勧誘、命令、禁止、使役、条件文がある。

従属節 (S 群構文の that 節) におけるラテン語接続法の法認識は、特に未完了過去においては、「意味論的に空虚な should」による迂言表現で対応された。動詞組織としての接続法は中英語聖書の時点で、特に未完了過去において不要になっていたのである。また、to 不定詞による書き換えの対応も見られた。

他方、中英語聖書にあって、ラテン語接続法の法認識が反映しない範疇に時間副詞節があることがわかった。これも意図的な対応であろう。おそらく英語という言葉は、節の構造が明示的かつ強い構文的な統率力をもっているため、その節内の統率自体がラテン語的な法認識を補っているからではないだろうか。

謝辞

本研究では、中英語について終始多大なご指導を賜った、明治大学狩野晃一准教授、また修士課程指導を賜った放送大学大橋理枝教授に深謝致します。さらに、40年も以前になりますが、国際基督教大学大学院で古英語を小林栄智先生から、中英語を中尾俊夫先生から、新約聖書ギリシヤ語を加山久夫先生から学べたことに感謝します。

文献

- Coates, J. (1983). *The semantics of the modal auxiliaries*. London: Croom Helm.
- Harsh, W. (1968). *The Subjunctive in English*. Alabama: University of Alabama.
- Leech, G. (2014). *Meaning and the English Verb*. New York: Taylor & Francis.
- Nishide, K. (1981). "Frequency of Subjunctive in English Biblical Translation (c.1000 - 1941)", in *Research Bulletin of Obihiro University*, II-5, 239-55.
- Warner, A. (1982). *Complementation in Middle English Syntax and the Methodology of Historical Syntax: a Study of the Wycliffite Sermons*. London: Croom Helm
- Yonekura, H. (1985). *The Language of the Wycliffite Bible: The Syntactic Differences between the Two Versions*. Tokyo: Aratake Shuppan.
- 浦田和幸. (2010). 「後期中英語における接続法の用法について—『ウイクリフ派聖書』『マタイ福音書』を資料に—」『東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies)』 81号. 447-465. 東京: 東京外国語大学.
- 小野茂. (1969). 『英語法助動詞の発達』 東京: 研究社.

¹⁾ 中世英語英文学学会第39回全国大会で示唆された。